

川崎市国際交流協会会長賞受賞作品

みんなの困った顔をなくしたい

宮前小学校 5年生 武島 瑞錦

私が通う小学校では、国語の時間になると外国から来た友達が学校の中に設けられた、日本語教室へと足早に向かって行く姿を見かける。実は私も小学一年生の頃は、彼等と同じように日本語教室で勉強をしていた生徒の一人だった。

そして、その頃の私は、日本語の授業を受けていても、先生の話す言葉がなぞの念仏のようにしか聞こえず、時々窓の外を眺めては、ただボーッとして時間をつぶすしかなかった。

また、今でも私の同学年生の中には日本語が分からず、自分の気持ちや考えを上手に伝えることが出来ない外国から来た友達がいる。私はその友達を見ていると、私の心は自分が一年生だった頃にタイムスリップして、「自分の今の気持ちを相手にうまく伝えられないつらさって、本当に悲しいよね。」と思えてくるのだった。

私が中国から川崎に来て間もない頃は、日本語が全く分からなかった私からしてみれば、日本語は本当に難しい外国語だった。日本人のだれと話をしてみても、全く言葉の意味が分からず、話の内容もちんぷんかんぷんで、まるで宇宙人と会話をしているような気持ちになっていた。母も私と同じように、何をする時でも一つ一つ通訳をしてもらわなければどこにも行く事が出来ない有様だったので、入学した小学校からの行事案内や連絡の手紙の内容が全く分からず、私と母は二人して途方に暮れてしまい、「何をどうしたらいいのか、全く分からない。」というような気持ちで不安な毎日を過ごしながら、小学一年生をスタートしたのだった。

今の川崎市には、いろんな国からやって来た人達が約四万五千人ほど住んでいる。そして、それら外国から来た人達が困らないように、役所や駅等の公共の場所には、日本語の他に英語や韓国語、中国語等の様々な外国の言葉で表記された案内も多く、私のような外国から来た人からしてみれば、本当に有り難い。だが私が通う小学校では、生活ルールや習慣の違いを説明したい先生と、自分がなぜ注意されたのか意味が分からず、気持ちや意見を伝えることが出来ない外国人の友達の両方が、困った顔をしている場面をよく見かける。私は、このような両方の顔を見てふと考えた。

「先生と日本語が出来ない友達の両方が笑顔になるような、良い解決方法ってないのかな。」

またその時、私が中国から川崎へ来た時に、困っていたことを思い出していたら、突然、「私が将来、外国から来た生徒達と通訳無しで話が出来ると先生になればいいのでは。」という思いが、急にストーンという音を立てて、私の心の中に落ちて来た感じがした。

「そうだ、私がみんなの困った顔をなくそう。」この瞬間から、これが私の夢になったのだ。私が今まで川崎で経験したことを基に、私は川崎の未来を明るく照らす先生になりたい。